

都市生活の場における「語られる人生」にみる

サクセスフルエイジングの要因

—京都市下京区に居住する超高齢者を対象とした修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチと社会関連性指標を用いた分析—

富澤 公子ⁱ，中西 典子ⁱⁱ

本稿では下京区に居住する超高齢者を対象に、心身機能の低下や社会的孤立などの深刻な側面が強調されがちな超高齢期において、地域コミュニティとの関わりやサクセスフルエイジング（幸福な老い方）、「老年的超越」の実態について量的・質的側面から明らかにした。質的データを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）で分析した結果、コアカテゴリーとして「老春：自由とつながりのある今が一番の幸せ」が導き出され、精神世界では「宇宙的超越・自己超越・執着の超越」の次元が確認された。社会関連性指標の分析からは「生活の主体性」をはじめ、すべての領域で高い得点が示された。本調査の対象となった下京区の超高齢者は、子どもや友人、近隣とつながった暮らしの中で孤独感はなく、「老春」と語る今を楽しみ、趣味や地域貢献する生活実態が明らかにされた。同時期に自治関係者を対象に行った量的調査からも自治基盤の強固なプラットフォームが示されており、サクセスフルエイジングにはコミュニティの役割が大きいことや、超高齢者は医療や介護保険を利用しながらも健康意識は高く、地域に貢献する資源でもあることが確認された。

キーワード：超高齢者，サクセスフルエイジング，老年的超越，コミュニティ，M-GTA，社会関連性指標

はじめに

多くの人が長生きを享受できる大衆長寿の時代を迎えている¹⁾。終戦直後（1947）の人生50年時代には、90歳まで生存する確率は男性0.9%、女性2.0%であったが、令和4（2022）年には男性25.5%、女性49.8%と、女性の半数は90歳に到達する状況にある（厚生労働省，2022）。長くなった高齢期のサクセス

フルエイジングは多くの人の関心事となっている。

しかしながら、効率性や若くあることに重きが置かれる経済成長志向の社会では、超高齢者の経験や潜在能力は注目されず、社会のお荷物、国家財政や経済発展にとってはブレーキをかける存在であるという考え方がある（日経BP，2018）。医療費・介護費用などの社会保障の増加への注目は、少子化による人口減少への危機感を助長する。「長すぎる老い」として、高齢者に対する若年層のネガティブな傾向は固定化する。

特に、都市部では、地域固有の文化の崩壊、近隣関係の希薄化などにより、高齢者の地域でのつなが

i 立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員

ii 立命館大学産業社会学部教授

りが弱体化し、人としての尊厳や役割の喪失による「社会的孤立」の増加が課題となっている(みずほリサーチ&テクノロジーズ, 2021)。高齢者にとって、社会的役割や生きがいなどの喪失は、加齢に伴う生理的機能の衰え以上に、認知症や鬱の誘因要因とされている(権藤, 2008)。

一方で、長寿地域(奄美群島・京丹後市)の研究からは、伝統的共同体を基盤に祭りや伝統・年中行事、習慣などの「無形」の文化資本が継承され、人とひとの“つながり”や、“きづな”の強固なコミュニティを見ることが出来る。これらの地域では、相互扶助や結の習慣のなかで超高齢者はこれまでの経験やノウハウを生かし、祭りの教師として敬愛され、若い世代と協働するポジティブな実態が明らかにされている(富澤, 2018b, 2019, 2021)。つながりや仕事、役割、生きがいの存在が、健康長寿やサクセスフルエイジングを実現する上で重要な要因であることが示唆される。

本研究が対象とする超高齢者(85歳以上)は、生涯発達心理学者のBaltesらの「ベルリンエイジング」研究からは、機能的にも社会的にも人間としての尊厳を保つことが困難となる世代(フォースエイジ:Fourth Age)とし、サクセスフルエイジングに悲観的である(Baltesら, 2003)。

確かに、年齢階級別の要介護認定率では、65歳以上の平均18.3%に対し、85歳以上の認定率は57.4%と全体の半数を超える(厚生労働省, 2022)。権藤らの板橋区超高齢者悉皆調査からも、前期高齢者に比べ身体面・認知面・ネットワークの縮小などの実態が報告されている(権藤ら, 2005)。

しかし、筆者らの長寿地域における超高齢者の地域生活に注目すると、身体機能の低下を経験やノウハウでカバーし、生涯現役で畑仕事に従事する姿や、祭りや伝統行事の先導役として地域に貢献する側面が浮かび上がっている(富澤, 2020, 2021)。加えて、超高齢期の幸福感は高齢期よりも高まるというエイジングパラドックス(Aging Paradox: 加齢の逆説)現象が明らかにされている。筆者らの調査からもそ

の傾向は確認されている(富澤ら, 2010)。その要因の一つとして、加齢に伴うポジティブな発達を理論化した老年的超越(Gerotranscendence)²⁾が注目されている(トーンスタム, 2017)。老年的超越は、J・エリクソンがライフサイクルに第9段階を追加し、超高齢期の課題として提示したものである(エリクソン, 2001)。

筆者らは、超高齢期の脆弱化する身体と対峙しながら深まっていく精神性や利他性、世代性、世界観や価値観の変容による幸福感の高まりを老年的超越として注目し、長寿地域に居住する超高齢者のサクセスフルエイジングの要因として研究してきた。

本稿は、これまでの継続的な調査研究の一環であり、アンケート分析を主とした前稿(『立命館産業社会論集』59-1)に対し、インタビュー分析を主としている。今回の分析では、都市部に居住する超高齢者の語りから暮らしの主体性や社会への関心などの社会関連性、サクセスフルエイジングの要因、老年的超越を明らかにするもので、インタビュー調査は木下のM-GTA(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)法を用いて分析(木下, 1999; 2003)し、アンケートは安梅の社会関連性指標を用いて行った(安梅, 1997)。

なお、これまでの超高齢者の語りをM-GTAで分析した研究は筆者ら以外には見られない。筆者らは奄美群島、京丹後市、遠野市の超高齢者研究の実績がある。奄美群島の超高齢者の語りからは、コアカテゴリーとして「目標は100歳」が導かれている(富澤, 2009)。この背景要因には、祭りや伝統行事が盛んで超高齢期でも働く場があり、長寿者を敬う習慣や長生きは幸せという言葉や共通認識があり、それらがコアカテゴリーの源にあると考えられる。

同じく、京丹後市の超高齢者の語りをM-GTAで分析した結果からは、「子どもらとつながる幸せ」が導かれている(富澤ら, 2016)。この背景要因には、地域の伝統産業である丹後織物の興隆のなかで同居が可能な質の高い住宅環境が整備され、三世代・四世代同居やいとこ婚の多さなど、子どもや親族との

日常的な交流がある。加えて、岩手県の中でも百寿者率の比較的高い遠野市の超高齢者の語りからは、「今が一番」というコアカテゴリーが導きだされている（冨澤, 2015）。この背景要因には、かつての大家族制度の暮らしや、飢饉・干ばつに悩まされた暮らしを経験したのちの今の安寧の心境が見いだされる。

このように、超高齢者の語りから導き出されたコアカテゴリーは、その地域特有の歴史や産業、仕事や日々の営みの基盤から生み出された心境の表出とみることができよう。それぞれの地域生活における超高齢者の幸福感は、若い頃とは異なる価値観や世界観の形成のなかで、若者とは異なる幸福感を生成する姿が見いだされるのである。

以上から、本稿ではこれまでの地域とは異なる都市部地域に注目し、そこで暮らす超高齢者のサクセスフルエイジングの基層を明らかにしようとするものである。

1 調査地域「京都市下京区」の概要³⁾

1.1 地形・産業・文化

京都市は政令指定都市であり、その中でも下京区には、主要幹線道路である河原町通・烏丸通・堀川通・五条通や鉄道ターミナル「京都駅」があるなど、京都市の玄関口として広域的な交通拠点としての役割を担っている。産業は、京扇子・京漆器・京仏具・京人形・京友禅などの伝統産業が数多く立地している。室町筋の繊維卸業の間屋街や四条通の商店街、そして百貨店が集中している。また、「市民の台所」としての京都市中央卸売市場や、先端産業の拠点である京都市サーチパークなどがある。

区内には祇園祭の鉦町ほこまちが多くあり、毎年7月になると山鉦が建ち、祇園囃子ぎおんばやしが聞こえてくる地域である。また、寺院や研究機関も多く、「学術・文化のまち」・「文化を生かした観光のまち」として発展している⁴⁾。

1.2 下京区のコミュニティの自治基盤

下京区の住民自治の起源は、明治2年に、明治政府の学校制度施行より3年早く地域住民の寄付（かまど金）などによって、各町組（番組）に1つの小学校「番組小学校」を設立し、学校の開校や運営に貢献してきたことにみられる（山田ら, 2019）。現在の下京区の自治単位は23の（元）学区コミュニティである。小学校は統廃合により7校であるが、地域活動は今も元「学区」単位で行われている。それぞれの学区の名称は、京都ならではの歴史が刻まれたものが多く、かつての平安京の地名や儒教、論語、易経などの故事から引用されている。こうした学区名は地域の歴史と人々のアイデンティを示す存在ともいえる⁵⁾。

2 調査方法

2.1.1 対象者の選定

調査対象者の選定は、区内の地域包括支援センターからの推薦者6名と学区自治関係者からの推薦者5名の11名（32学区中8学区居住者）である。男性4名、女性7名である。

2.1.2 調査方法

自宅を訪問し、インタビュー調査とインタビューを補完するアンケート調査を行った。インタビューは半構造化面接法により、現在の生活スタイル、暮らしの満足度、健康観、人生評価、歳を重ねることへの思いなどで、その順番は拘らずに話が途切れた時に次の質問をした。アンケート調査は、社会関連性指標の項目（安梅, 2000）に準じた。面接時間は各60～90分の範囲である。

2.1.3 調査時期

調査期間は2022年6月21日から7月20日の期間で実施した。

2.2 倫理的配慮

実施に当たっては、「立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会」の承認を得た（衣笠-

人-2022-5)。また、インタビュー調査には事前の文書および口頭で調査の目的と個人情報の保護などを説明し、同意書を得て録音を行った。

同じ方法で実施することで比較分析が可能と判断した。

3 結果

2.3 分析方法

- ①超高齢者の語りのデータの質的分析法の一つである M-GTA で分析する。
- ②社会関連性指標は単純集計しその結果を先行研究と比較分析する。

2.4 M-GTA (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ) を用いた理由

M-GTA は、語りのデータを研究者の視点から読みとり深い解釈を行っていくもので、生活歴の長い超高齢者のサクセスフルエイジングや精神次元を紐解く分析として有効な方法と考えている。加えて、M-GTA は筆者らがこれまでの調査で用いた方法であり、同じ世代を対象とする今回の調査においても、

3.1 調査対象者の属性及び交流の状況

属性及び交流の状況等は図表1のとおりである。超高齢者11人の平均年齢は89.1歳。一人暮らしは7人で、1人を除き子どもは近居住いが多く日常的交流は密である。身体状況は要支援が7人、自立は4人で、全員が日常の家事等の行動は可能な状況にある。医療受診状況では、2人は受診なし、9人は受診している。

3.2 アンケート調査結果

3.2.1 心理面の適応状況

対象者に、暮らし向きや主観的健康観、生活満足度などの心理適応状況を尋ねた結果は、図表2のと

図表1 調査対象者の属性及び交流状況

性別	年齢	元職業・活動	家族形態	介護状況	医療受診状況	健康観	日中の過ごし方	子どもとの交流	近隣・友人との交流	地域愛着	コロナの影響	指標得点	
A	女性	90	主婦	一人家族近居	要支援2 デイ週2	受診	まあ健康	起床6:30 家事・門の掃除	近くに住んで顔を見せる、買い物頼む	近隣、デイでのおしゃべり、おかずのおすそ分け、電話	70点	コーラス・集まり中止	16点
B	女性	87	服飾・和蠟燭	一人家族近居	要支援2 デイ週2	不整脈 月1回	健康な方	起床8:00頃 家事・銭湯	近くに住んで、顔を見せる	近所や、デイ、銭湯でおしゃべり	75	コーラス・集まり中止	16
C	女性	92	主婦 法衣仕立	一人家族近居	要支援1 デイ週1	高血圧 の薬	健康な方	起床7:00頃 家事・編み物、老人会	毎夕食、長男が持ってきて、入浴して帰る	お向さんとおしゃべり、老人会のイベント、町内会参加、編み物を差し上げる	100	地藏盆・イベント中止	16
D	女性	86	洋服仕立 活動	一人家族遠距離	要支援2 住宅改修	高血圧・高脂血症 の薬	健康な方	起床5:00 家事・老人会活動	子どもとは遠距離、たまに電話	学区のボランティア、花壇、学校の農園で交流、集まりの場がある	80	町内会活動の縮小	15
E	女性	86	文房具店 経営	同居 娘家族	要支援2 デイ週2	受診	健康な方	起床8~9:00 店番、趣味	留守番、家事一部、落語会など一緒に行く	店での接待、出会うと挨拶、シルバーコーラス、登山の仲間	50	山歩き・イベント中止	15
F	女性	91	主婦	一人家族近居	要支援2 デイ週2	月1回 眼科	健康な方	起床6:00 家事、編み物、門の掃除	週1回、夕食を持参	編み物を差し上げる、門掃き、おしゃべりを通じた交流	98	地藏盆・集まり中止	14
G	男性	86	教師・自治会 活動	夫婦二人	要支援2 デイ週2	高血圧 の薬	健康な方	起床7:30 町内会活動	近くのマンションに住む	学区老人クラブの活動、町内会、広報紙の編集	90	イベント縮小	18
H	男性	91	現役・呉服小物	一人家族近居	自立	高血圧 の薬	健康な方	起床5:30 朝風呂仕事	仕事を通じ毎日	出会うと挨拶する、パソコン教室に参加	100	学ぶ場の縮小	13
I	男性	86	現役・仏具店	同居 息子家族	自立	高血圧・高脂血症	非常に健康	起床5:00 早朝の掃除、仕事	仕事を通じ毎日	仕事、早朝掃除、伝統行事・祭りの関わり、町内の会合	100	外食が減った	17
J	男性	88	呉服関係	同居 息子家族	自立	なし	非常に健康	起床5:00 散歩、新聞	同居、食器洗い担当	出会えば挨拶、歩こう会で月1回集まる	80	イベント縮小	14
K	女性	90	主婦・女性活動	一人家族市内	自立	なし	非常に健康	起床6:40 門掃除、女性会	電話での会話	女性会の活動を主宰、早朝掃除、学習会、交流	100	女性会のイベント縮小	18

おりであった。健康観では全員が「非常に健康・健康な方」と答えている。超高齢者は若者の健康観(疾病がないこと)と異なり、投薬など処方されながらも日常生活に支障ない状況を健康と判断しているようである。暮らし向きと生活満足度は「非常に満足・満足」の回答が9割を超えていた。この結果から心理面の適応状況は高い状況にあることが伺えた。

図表2 心理適応状況

項目	内容	割合(%)
暮らし向き	①非常に満足	54.6
	②満足	36.4
	③やや不満	9.0
健康観	①非常に健康	27.3
	②健康な方	72.7
生活満足度	①非常に満足	45.5
	②まあ満足	45.5
	③やや不満	9.0

3.2.2 社会関連性指標による結果

(1) 得点状況

社会関連性指標は生活の主体性や社会との関わり
の頻度を調べるのに有効な方法として、信頼性と妥当性が検証されている(安梅, 1997)。図表3のように5つの領域、18の質問項目で構成され、肯定回答(はい)を1点とする。本調査では、超高齢者を対象としているため85歳以上の分析をしている安梅(1997)の内容と比較する。なお、「社会への関心」の*の部分(ビデオ等からインターネット等)はその後変更されているため、変更後の質問項目に従って行った(筑波大学, <https://plaza.umin.ac.jp>)。

回答からは、超高齢者には不利な項目(本・雑誌を読む、インターネットやスマートフォン等の利用)では肯定は低下するものの、それ以外の項目では肯定が高い状況にあった。これらの結果からは、社会

図表3 社会関連指標の回答状況

領域	質問項目	はい(人)	いいえ(人)
生活の主体性	生活の仕方を自分なりに工夫していますか。	11	0
	物事に積極的に取り組む方ですか。	11	0
	健康には気を配る方ですか。	11	0
	生活は規則的ですか。	11	0
社会への関心	新聞を読みますか。	10	1
	本・雑誌を読みますか。	6	5
	*インターネットやスマートフォン、携帯電話など便利な道具を利用する方ですか。	9	2
	趣味などを楽しむ方	11	0
他者との関わり	自分は社会に何か役に立つことができると思いますか。	10	1
	家族・親戚と話をする機会がありますか。	10	1
	家族・親戚以外の方と話をする機会がありますか。	11	0
	誰かが訪ねてきたり訪ねて行ったりする機会がありますか。	11	0
身近な社会参加	地区会、センター、公民館活動などに参加する機会がありますか。	10	1
	近所づきあいはありますか。	11	0
	テレビを見ますか。	11	0
生活の安心感	職業や家事など何か決まった役割がありますか。	11	0
	困った時に相談にのってくれる方がいますか。	10	1
	緊急時に手助けをしてくれる方がいますか。	10	1

*安梅の質問項目では、この項目は「ビデオなど便利な道具を利用する方ですか」である。

図表4 各領域別・性別得点の平均値

性別	生活の主体性	社会への関心	他者との関わり	身近な社会参加	生活の安心感	社会関連指標
	4点	5点	3点	4点	2点	全体 18点
男性	3.6	4.2	2.5	3.4	2.0	15.7
	(4.0±0.0)	(2.1±1.4)	(2.4±1.1)	(3.3±0.8)	(2.0±0.0)	(13.9±1.8)
女性	3.9	3.2	3.0	3.4	2.0	15.5
	(3.3±1.2)	(1.4±1.3)	(2.5±0.8)	(2.1±1.2)	(1.7±0.7)	(11.0±3.7)

()は安梅(1997)の年齢別調査結果「85歳～」である。

的孤立が懸念される超高齢期にあって、「社会への関心」、「他者との関わり」、「身近な社会参加」など、生活全般にわたり社会関連性は高いことが伺えた。

(2) 社会関連指標の性別・領域別平均値の状況

次に、各領域別・性別の平均値をみたものが図表4である。指標全体の総合得点における性差は軽微であった。しかし、「社会への関心」では男性の平均値が高く、「生活の主体性」と「他者との関わり」では、女性の得点が高いという傾向が明らかにされた。

なお、男女別の()の数値は安梅(1997)の「85歳以上」の調査結果である。比較すると女性は全ての領域で上回っている。全体得点は男女とも「85歳～」を大きく上回り、安梅の調査の年代別「75～79歳」(男性 15.0 ± 3.1 、女性 14.6 ± 2.4)の得点に近い。社会関連性の得点は生命予後との関連が明らかにされている(安梅, 2000)。10歳程度若い年代と近似する結果は明るい見通しともなる。

3.3 インタビュー調査の結果

3.3.1 M-GTA 分析について

11人の逐語録をデータとして、M-GTA分析を進めた。M-GTA分析法の特徴は、一人ひとりの語り に密着して概念を作り出し、生成された概念を比較分析してカテゴリー化し、さらに継続比較する中からコアカテゴリーを導き、理論化する(図表5)。最終的に、結果は全体図にまとめる。本稿の分析テ

マは、データに密着した分析(grounded on data)という視点から、超高齢者のサクセスフルエイジングの要因とした。

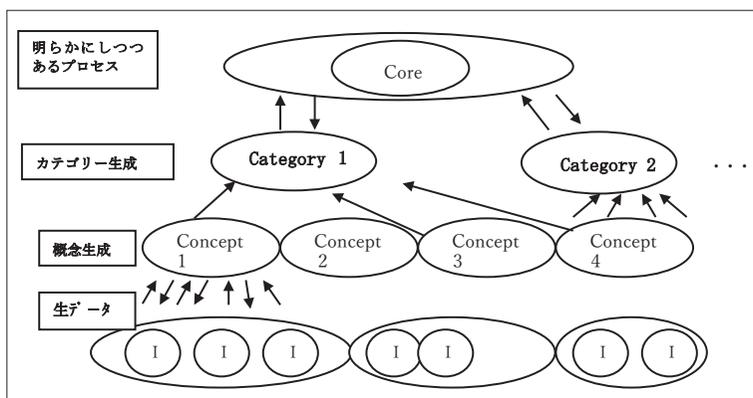
M-GTAでいう分析焦点者(分析対象者)は下京区居住の超高齢者である。したがって、分析テーマと対象者にとって関連のありそうな個所に注目し、分析対象者にとってどういう意味になるのかを解釈しながら、理論を構成する最小単位となる概念を生成していく。

概念の生成にあたっては概念ごとにワークシートを用い、概念名・定義・具体例・理論的メモを作成していく(木下, 2003)。この過程は常に分析テーマに密着しながら、概念と概念の関係をカテゴリーへ、カテゴリーとカテゴリーの相互検討からコアカテゴリーへと収束される。最終的には全体図にまとめ、分析結果は実践に応用されることを重視する。

M-GTAでは最初概念生成が重要とされる(木下, 2003 p160)ことから、分析テーマに照らして「ディテールが豊富で多様な具体例がありそうな者」としてAさん(90歳)を選んだ。京都特有の町家(間口が狭く奥行きのある)住まいで、見合い結婚で家具職人の家に嫁ぎ、夫亡きあとは姑の主導で家計をやりくり、「始末」⁶⁾しながら子どもを育て、つましく暮らしてきた人である。

1例目からは22の概念が生成された。2例目は1例目と対極にある人が望ましいとされており、母子

図表5 分析プロセス図



図表6 次元・カテゴリー・概念・定義一覧

【コアカテゴリー】 老春：自由とつながりのある今が一番の幸せ 【日々の営みの次元】	
カテゴリー・サブカテゴリー	概念及び定義
＜本人の要因＞	
＜満足感のある暮らし＞	①「老春：今が一番の幸せ」＝老春：誰からも何も言われず一人でも自由に暮らす今が一番の幸せという境地
	②「老いの楽しみ：趣味のある暮らし」＝趣味が楽しめる自由な暮らしが、老いの日常を輝かせている
	③「ポジティブな健康意識」＝薬は飲んでいないが、家事ができ、仕事ができているから健康という意識
＜自立した暮らし＞	④「起床時間：ライフスタイルが反映」＝都市に住む高齢者の起床時間は多様なライフスタイルが反映している
	⑤「個の自立：生き方への哲学」＝歳を重ねる中で、個の自立につながる生き方の哲学を持っている
	⑥「家族へ配慮：迷惑かけない意志力」＝親の本音は子どもには迷惑かけたくないことでその意志力が自立を支えている
	⑦「長生き：希望と戸惑い」＝親の亡くなった年は超えたが、100歳には戸惑いがある
＜地域貢献する暮らし＞	⑧「地域への高い愛着度」＝長年暮らす地域には濃密な交流があり、愛着と地域貢献する暮らしがある
	⑨「早起の門掃き・水まきの習慣」＝清潔な環境に貢献する超高齢者の姿がある
＜ネガティブ意識＞	⑩「今でも社会に役立つことしたい」＝超高齢期になっても社会貢献したいという志向性は強い
	⑪「さみしがり：兄弟、同窓生がいない」＝兄弟や同窓生が亡くなるさみしがりな意識を増す
＜伝統文化・環境要因＞	
＜つながりのある安心な環境＞	⑫「子どもとつながっている」＝それぞれに子どもとつながる物語がある
	⑬「友人とつながっている」＝一人暮らしでも友達とつながることが寂しさを緩和してくれる
	⑭「近隣やまつりとつながっている」＝一人暮らしでも近所や祭りにつながっている環境が寂しさを感じない
＜老いを支える京の生活文化＞	⑮「しきたりを守る生活の知恵」＝親（義母）から言われてきた「始末」は生活の知恵として生かされている
	⑯「母（義母）は偉い人だった」＝長年の暮らしでの母（義母）との関係は尊敬の言葉となって語られている
	⑰「多様な供養スタイルのお経さん」＝お経やお供えはそれぞれの生活スタイルで無理なく行われている
＜地域の課題＞	⑱「少子高齢化：地蔵盆が縮小」＝各町内の伝統行事「地蔵盆」も、少子高齢化の影響で縮小している
	⑲「近所の変化：マンションの増加」＝マンションの増加や商店の減少などの地域課題に直面している
	⑲「伝統産業：職人がいない危機」＝伝統産業の衰退は作り手の職人がいないということが危機
＜都市部の居住要因＞	⑳「身近にある医療機関」＝身近に安心した医療が提供され自立生活の支えになっている
	㉑「機能訓練型サービスへの感謝」＝デイサービスは身体機能を高めてくれ満足感と感謝がある
	㉒「文化・イベントを楽しむ機会がある」＝若い時と同じように芸術文化に触れ心豊かな生活が実現している
＜地域コミュニティ要因＞	㉓「濃密な近所付き合い：よう喋る」＝長年住み慣れた地域なので近所の人同士よく喋る関係が出来上がっている
	㉔「地域の祭り：コミュニケーションの場」＝祭りや地蔵盆は町内のみんなの力で、伝統を絶やさない誇りがある
	㉕「お互いへの思いやり：お裾分け」＝日常的に気取らない助け合いの知恵がある
＜人格形成の要因＞	㉖「ボランティア：自立と生きがい」＝活動は1日のなかで無理なく行って、自立や生きがいにつながっている
	㉗「ポジティブに語る疎開体験」＝超高齢者は戦争体験者で疎開の経験は人生にプラスになったと語る
	㉘「仕事、育児、介護：やり切った感」＝仕事や育児、介護も力尽くし、旅行など趣味も楽しみ、やり切った感がある
【精神世界：老年的超越の次元】	
	㉙「宇宙的超越：死の恐怖が薄らいで先祖や社会に生かされている」＝先祖や社会に生かされているという超越感
	㉚「自己超越：思い出すのは楽しいことばかり」＝過去の思い出は楽しいことばかりという気持ちが増してくる
	㉛「執着の超越：ものやお金でない幸せがある」＝お金でない自由という幸せがある

次元【 】, コアカテゴリー「 】, カテゴリー<>, サブカテゴリー<>, 概念「 】, 定義=

家庭で75歳まで働いた活動的なBさん(87歳)とし、恣意的にならないように類似比較と対極比較を行う中で、既に生成された概念のヴァリエーションの追加とともに、新たに4つの概念が生成された。

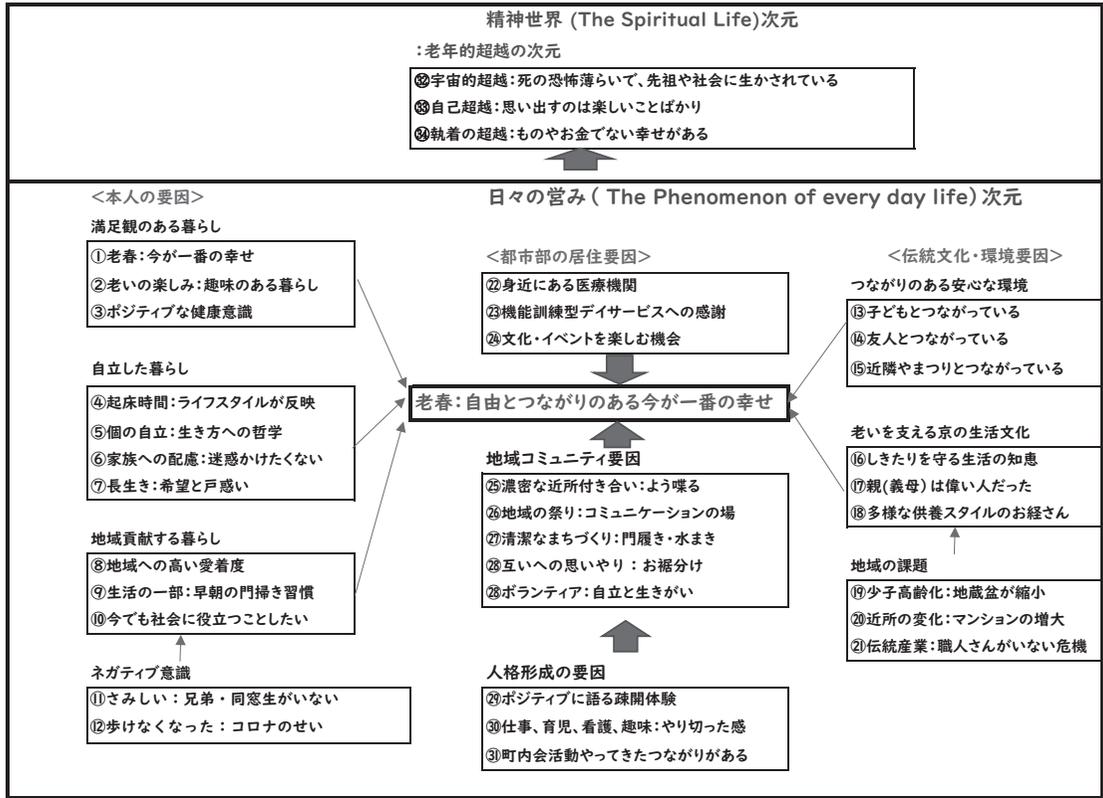
続いて3例目で3つ、4例目、5例目でそれぞれ2つ、6例目、7例目でそれぞれ1つの概念が生成され、8例目では新たな概念は出てこず、また、新たに確認すべき問題点もなかったことから、M-GTA

でいう「理論的飽和化」と判断した(木下, 2003, p220)。分類・整理を行った結果、最終的に34の概念、5つのカテゴリー、7つのサブカテゴリー、2つの次元、1つのコアカテゴリーが浮かび上がってきた(図表6)。

3.3.2 M-GTA 分析結果

全体図は図表7の通りである。カテゴリーとカテゴリーを比較分析するなかから、中心部に【日々の

図表7 全体図：京都市下京区における自宅居住の超高齢者のサクセスフルエイジング



営みの次元】、そこから【精神世界: 老年的超越の次元】へとつながっていく。中心部の日々の営みの次元に、コアカテゴリーとなる『老春: 自由とつながりのある今が一番の幸せ』が導かれた。

このような幸福感の源には、<本人の要因>、<伝統文化・環境要因>、<都市部の居住要因>、<地域コミュニティ要因>そして、<人格形成の要因>の5つの要因があり、そこから到達していく精神世界には、「宇宙的超越」、「自己超越」、「執着の超越」

の3つの老年的超越次元がみられた。

【日々の営みの次元】

《本人の要因》

超高齢期の暮らしの満足感の源の1つに、<本人の要因>がある。これは3つのサブカテゴリーからなり、「老春: 自由とつながりのある今が一番の幸せ」というコアカテゴリーにつながっていく。

<満足感のある暮らし>

① 「老春: 今が一番の幸せ」= 老春: 誰からも何も言われず自由に暮らす今が一番の幸せという境地

92歳女性は、「今は最高です。今、老春ですかね。最高です。そうです。その通りです。今は何しても、誰にも叱られませんか」と語る。90歳女性は、「今はお金でない幸せがあります。今は自由で、こんな幸せないわ」と、一人で自由でいられる幸福感を語る。現役で仕事をする86歳男性は、「人生の幸福感は100点はいかんけども90点くらいやろな。人生に悔いそれはないな」と語る。86歳女性は、「表現は難しいけど、内面からふっと瞬間湧き出る喜びを感じます」と語り、

“まだまだこれから幸福感が深まるかもしれないし”と、先の人生をポジティブに見つめているようである。

一方で、同年代の女性は、“今、100点。誰も何も言わないし、何も不足ないです。ただ、ボケないようにだけ思っています”と、幸福感の中にも負の部分の恐れを語っている。

②「**老いの楽しみ：趣味のある暮らし**」＝趣味が楽しめる自由な暮らしが老いの日常を輝かせている

91歳女性は、“日中は編み物したりしてます。毛糸だと私がいなくなったら捨かされるから、形にしていたら誰かが着てくれるかもしれないので。でも、自分が楽しみでやっていますので”と語る。別の91歳女性も、“(編み物)出来たら知らない人にも差し上げたりしています”と語る。86歳女性は、“趣味は音楽を聴くこと。それとタブレットでゲームをするのはすごくいいです”と、若者のような語りがあがる。

同じく86歳女性は、“落語も音楽も楽しみ、山へも、ちゃんと道がある時は一人で行きます”と語る。また、若い頃はゴルフ三昧の86歳男性は、“今はスポーツ観戦。今でも甲子園に行く”と語る。加齢に応じた趣味を楽しみ、趣味を通じた交流もある。

90歳女性の、“私には時間はありませんが、暇はあります。その暇を趣味や運動など計画を立て積極的に動いています”という語りに、若い時とは異なる、超高齢期ゆえの超越的時間感覚と、それゆえにポジティブに生きる意志を見た。

③「**ポジティブな健康意識**」＝薬は飲んでいるが、家事ができ、仕事ができているから健康という意識

超高齢期の満足感の背景にはポジティブな健康意識がある。“医者にはかかっているけど、自分で食事を作っているから健康”や、“私は血圧のお薬はもらってます。これは遺伝で仕方がないと思っています”、また、“高脂血症は遺伝性なので食事に気を付けているといけると思っています”など、病気をポジティブにとらえた健康意識がある。

<自立した暮らし>

④「**起床時間：ライフスタイルが反映**」＝都市に住む高齢者の起床時間は多様なライフスタイルが反映している

88歳男性は、“朝は早いです。5時前には起きてます。朝、散歩に出ますねん”。また86歳男性は、“朝5時に起床、決まっています。それから道路をみな掃除しますねん”と語る。90歳女性も、“朝6時40分に起きます。顔洗ったらすぐに(外)掃除にかかります。掃除が大変”と語る。

一方、“朝寝坊の方で8時か9時頃に起きます。夜11時頃まで落語を聞いてます”と語る86歳女性もいる。都市の超高齢者の実態は、高齢者は朝が早いという通説とは異なり、ライフスタイルが多様で起床時間もまちまちである。

⑤「**個の自立：生き方への哲学**」＝歳を重ねる中で、個の自立につながる生き方の哲学を持っている

今も地域女性会の会長として活動の先頭に立つ90歳女性は、“その気になってもらおうと思ったら、自分の態度も変えないと相手も変わらないと思います”と語る。続けて、“どうせ生きていくにも、いややと思ってもその日一日。あれをしようとか、お掃除終わったら何時に出ていくとか、自分で計画的に考えて行動します”。そして、“やろうと思ったことはその日に始末するようにする。しとかなないと、なんぼでもたまっていますので”と、家事と地域活動を両立する実践を語ってくれた。

また、現役の経営者は、“まあ、まず、人に嘘はつかんことやわ。誠実それで対応したら、相手もそうして騙された気にならんわ。モットーやな”と、語る。人生経験を重ねて確信した人生哲学が、それぞれの老いの日常の営みとなっている。

⑥「**家族へ配慮：迷惑かけない意志力**」＝親の本音は子どもに迷惑かけたくないことでその意志力が自立を支えている

90歳女性は、“子どもは死ぬまで子どもで親は死ぬまで親だから、歳いっても子どもですから、親としては心配をかけないようにしたいと思ってます”と語る。87歳女性も、“家族に迷惑かけんとこ思うから、できるだけ自分で動こうと思ってます”と語る。また、子どもが遠方にいる一人暮らしの女性は、“私は子どもに心配をして欲しくないです。いずれはサービス付き高齢者住宅に行きたいと思っていますが、郷に入れば、また良い生活ができると思っています”と、子どもに心配させたくない意志力と、新たな状況にも対応できるという自信が語られる。

⑦「**長生き：希望と戸惑い**」＝親の亡くなった年は超えたが、100歳には戸惑いがある

90歳女性は、“知らん間に90になった。自分で90歳。え、と思います”と語る。“長生きはいや、100歳になったら世話にならんあかんしね、大変や”と語る91歳男性。現役で仕事をしている86歳男性は、“そもそも昔は80が目標で、親は84で亡くなってそれを超えるのが目標で、今、87歳、どうしようかな”と語る。健康に自信を持つ91歳男性は、“歩ける限り生きたいと思います。今も杖なしで歩けます。できたら100歳まで生きたいです”と語る。女性会活動のリーダーの90歳女性は、“地域と関わって、常にやっぱりお話しする方がいますので、関わる方が来られて寂しいと思うことがないです”

と、地域活動が長生きにつながっていると語る。一方で、「長生きはもう今で充分。足があかんようになったから。歩くのが辛いです」とコロナで歩けなくなったという90歳女性は語る。歩けることが長生きを希求するキーワードの一つのようである。

<地域貢献する暮らし>

⑧「地域への高い愛着度」＝長年暮らす地域では濃密な交流があり、愛着と地域貢献する暮らしがある

86歳女性、「私、生まれたところはここなんです。結婚して出ましたけど、戻ってずーとここに暮らしています」。そして、「日にちを決めて週3回くらい、朝7時までに水やりをしています」と語る。老人クラブの会長は、「私の場合は地域との関わりがあって、たまたま広報をやっているのが生きがいでもあります」と語る。地域活動が愛着度を高め、生き生き暮らす要因となっているようだ。また、「高齢者が企画する方が気持ちが分かって、よいと思います」という活動への誇りもある。

⑨「早朝の門掃き・水まき習慣」＝清潔な環境に貢献する超高齢者の姿がある

「門の掃除は毎朝してます。葉っぱが落ちますので。どこまでできるかわかりませんが、できるだけやっています」、「朝掃除していて、通る人にご挨拶してます」と語る91歳女性。「道路をみな掃除しますねん、約30分くらいです。冬は暗いから、懐中電燈持ってやります。癖になってきて夏では4時半に起きてます」と語る86歳男性。90歳女性は、「朝6時40分に起きます。顔洗ったらすぐに掃除にかかります。お日様が上がる前に早よお掃除しないと」など、早朝の掃除が当然の習慣になっている語りが、続々出る。

「朝の掃除が運動だと思っています」に代表されるように、超高齢者にとっても健康生活の源にもなっているようである。

⑩「今でも社会に役立つことしたい」＝超高齢期になっても社会貢献したいという志向性は強い

「しゃからね、水曜日にね、区域はちがうけど、ボランティアで行けないかなと思ってます。87歳やったら、取ってくれへんかな、一回聞きに行ってみようかなと思います」。例え1日、2、3時間、半日でもできるし。なんかちょっとでも、役に立たないかなと思います」という語りがある。91歳男性は、「おこがましいこと言えませんが、出来たらしたいです。五条通りの清掃、月1回、行ってます。人に言えることではないですけど」と控えめに語る。

また、「社会に役立つこと、あるとそう思います」と、老人クラブ会長は語る。90歳の今も、女性会会長として地域から尊敬されている方もある。地域活動は普段の行為として当たり前と考えている人が多い。しかし、活動していない超高齢者も、社会に役立つことへの志向性は強い。

<ネガティブ意識>

⑪「さみしい：兄弟、同窓生がいない」＝兄弟や同窓生が亡くなる寂しさがネガティブな意識を増す

80代後半から90歳に入ると、身近な人が亡くなっていく。「兄弟は7人いたけど、上2人も亡くなって」、「友達がたくさんいたけど全部亡くなってしても」という語りが多くなる。「同窓生で旅行に行ったけど、この4、5年の間に皆んな亡くなりました」。そして、「今はコミュニティのつながりがありますが、友達がないのでさみしいです」と語る。身近で特別な人の喪失感、他に代えがたいという語りがあふれる。

⑫「歩けなくなった：コロナのせい」＝コロナのせいで、散歩や外出が減り家に閉じ籠っていたから

ネガティブな語りに、コロナの影響がある。「足が悪くなったのは1年ほど前からです。コロナで、出れなくなったでしょう。私はコロナで歩けなくなったと思って、恨んでいます」という語りや、「コロナになるまでは週1回のコーラスに行っていました」。近所の人、毎週のようにここに来てましたが、コロナでなくなりましたね」と、コロナで交流が減った影響は超高齢者ほど大きいようだ。一方で、「昔は家で食べるのは月のうち3回くらいが上等やという時代があって、それで血糖値も上がって。そういう意味では、コロナで、外で食べる飲むは終わったね。いい機会だったわ。」という語りもある。

〈伝統文化・環境要因〉

「老春」と語る要因の2つ目に伝統文化・環境要因がある。

〈つながりのある安心な環境〉

⑬「子どもとつながっている」＝それぞれに子どもとつながる物語がある

90歳女性は、「長男が近くで、休みになったらお母さん何か用あるかと言って来てくれます」。また、87歳女性は「ほん近くに住んでいます。娘はいつものぞきに来てくれます」。92歳女性は、「食事は朝と昼は自分で作ります。夜は、嫁が作って息子が持ってきてくれます。私が食べている間に息子はお風呂に入って、器を持って帰ります」と語る。91歳女性は、「長女の婿がこの近くの市場に勤めていますので、週1回夕食を持って来てくれます」など、子どもとのふれあいの物語があり、一人暮らしの安心感を醸成している。

⑭「友人とつながっている」＝一人暮らしでも友達とつながっていることが寂しさを緩和してくれる

一人暮らしを支えている要因の2つめに友達とつながっていることがある。食事会や歩こう会、毎晩の電話など、寂しさを緩和してくれる生活がある。「きょうだいよりも友達と毎日しゃべってます。一人暮らしの人がたくさんいるので、向こうから電話が毎日かかってくるばかりです」。また、「銭湯には近所のお年寄りもたくさん行っているの、ちょっと行かれへんかったら心配して、何してたんと言われます」という語りがある。「歩こう会に入ってますので毎月1回は行ってます」。「今パソコン教室に月2回行ってます」など、男性もさまざまにおしゃべりする機会がある。話せる日常に老いが輝いてみえる。

⑮「近隣や祭りにつながっている」＝一人暮らしでも近所や祭りとつながった環境が寂しさを感じない

92歳女性は、「向かいの奥さんや老人会の人、時々来てくれます。巡回する交番所のおまわりさんも来てくれます」と語る。また、「ここは老人クラブの活動でレクリエーションなど、南座とか行ったりしていますそれが楽しみと語る。町内会長をしていた男性は、「近所で前通って会うたら声掛けて話します。あ、元気かとか」とか。地域活動を長年している女性は、「地域とのつながりは常のつながりが大切だと思います。やっぱり、人の絆ですかね。自然に知らんうちにできていると思います」と語る。ある女性は、「地域でも、おせっかい心がなかったら物事は続かないと思います」と語る。近隣とつながった暮らしやコミュニティでの触れ合いは、寂しさを感じない重要な要因になっているようである。

〈老いを支える京の生活文化〉

⑯「しきたりを守る生活の知恵」＝親（義母）から言われてきた「始末」は生活の知恵として生かされている

90歳女性は、「ここに嫁いだ時にお義母さんが、私とこは「しまつ」でここまで来てんやさかい、あんたさんも「しまつ」してくれやすや」と言われました。また、「今はゆっくり食べるけど、お義母さんから食事の時は女は座ったらあかんと言われたので、立って食べていました」と、亡くなった今も教えが生きている語りがある。また同世代の女性は、「季節が変わるたびにいろんな家の建具替えたりしてます。手が届かなくなったら辞めるんですけど、今年も届いたので替えました。今年もよかったです」と、祭事や季節にあわせて替える建具替えは、心地よく暮らすための京の人々の知恵である。親（義母）からの習慣が老後の生活の糧として生かされている。

⑰「母（義母）は偉い人だった」＝長年の暮らしで母（義母）との関係は尊敬の言葉となって語られている

「お義母さんは働き者で、病気しはらへんで私を助けてくれはったんです」という語りや、実母の行いで、「しやけどお母さんもしっかりしてはったな。死後のことも全部してました。私もそのようにしなあかんと思います」と語る。お義母さんは病院に入院して1週間で亡くなりました。私が代っている時に亡くなって。「あんたはん、そこにいましたか。あんたはんご苦労さんやったな」と言われました。「最後は私にだけに話しました。姑も偉い人やったと尊敬してます。私も、そうお礼を言って死にたいな、そのようにして亡くなりたいと思います」という語りがある。同居生活で様々な軋轢や制約があったものの、臨死の中で和合し、同年代になった今、私も見習いたいという気持ちの高まりを披露する。

⑱「多様な供養スタイルのお経さん」＝お経やお供えはそれぞれの生活スタイルで無理なく行われている

「亡くなった人は月命日でお経さん、あげます。仏さんが11人も居はりますや、過去帳をみたら毎月一人づつ月命日、お経さんあげます」。また、「親からの申し送りなので、親の姿を見て育ったので、毎朝水換えて、簡単なお経さんあげています」という語りがある。一方で、「お仏壇、時々水あげます。2階にあるので、ついほったらかしになります」という語りもある。「朝はパンですので、主人が亡くなって10年。パンとコーヒーは必ず主人にもお供えします。主

人の分も必ず焼いておいて。ご飯をあげてなくても気が楽になります”という語がある。それぞれのやり方で先祖供養がなされている。なお、京都では、大事なものに「さん」をつける習慣がある。今回の語りでも、「お経」でなく「お経さん」である。

<地域の課題>

一方で、少子高齢化やマンションの増加、伝統産業で職人さんがいない危機など、地域の課題も語られる。

①⑨ 「少子高齢化：地蔵盆が縮小」＝各町内の伝統行事「地蔵盆」も、少子高齢化の影響で縮小している

“お子たちがいなくなってもお地蔵さんに悪いと思って、地蔵盆はお祀りしてます”という語がある。また、“行事、若い人に参加してほしいけど、現状は年寄ばかり”という語りや、“若い人をどのようにお誘いするかが課題。何か行事をしても、若い人は参加されないのが、難しいですね”と、少子高齢化の危機や若い人の参加が少ない現状が語られる。

②⑩ 「近所の変化：マンションの増加」＝マンションの増加や商店の減少などの地域課題に直面している

“昔はこの町内はみんな商売で、いろいろあって。洗濯屋やたばこ屋さん、この通りはお店が多かった。それがみんな変わってしまいました”。“お店は、今は全然ありません”と、生まれ育ったまちの変化を語る。老人会の会長は、“今は、マンションが100棟。そこは管理会社が一活で払っているのに住人は入っているという感覚がないですね”と語る。また、“新しく入った人が町内会に入らない、危機的な課題です”と、町内の役員をしている男性は語る。一方で、“マンションの方も地域とつながりたいと思っている人も思っていない人もおられるので。子どもさんがおられると地域との絡みはありますね”など、マンション住人との共存の可能性を模索する語りもある。

②⑪ 「伝統産業：職人さんがいない危機」＝伝統産業の衰退は作り手の職人さんがいないということが危機

今も現役で和装小物を扱う91歳の男性、“和装小物を作る人がいなくなってきたので、製造卸ですが、製造の部分が出来なくなって、商品の卸も販売も出来なくなってきました”、“なかなか、面白い商売でしたよ。そら、よそより変わったものを作って、色にせよ、考えてね。それを外注にお願いしたけど、今は、発注先が出来なくなって、それが、出来んようになりました。商売が出来んようになりました”、“和装離れより、職人さんの高齢化の方が大きいです”と、伝統産業の危機は、伝統産業を支えてきた職人さんの高齢化が大きいと語る。

<<都市部の居住要因>>

②⑫ 「身近にある医療機関」＝身近に安心した医療が提供され自立生活の支えになっている

“病院は、ここから5分もかからない所です。ここは、わりあい福祉サービスも揃っていて不便はないです”。ある人は、“夕方、指圧の先生に行ってます。指圧、肩がこりこりで。行かないと、どないしてたのやと先生に言われます”という語がある。“膝が痛くなった時には、お薬、頂いてます。安心です”など、身近に、低料金で受診できる医療機関があることは、病気を抱えながらも安心して暮らせる要因となっている。

②⑬ 「機能訓練型デイサービスへの感謝」＝デイサービスは身体機能を高めてくれ満足感と感謝がある

“デイサービスに週2回行かせてもらってます。今行ってるデイサービス、機械ばかりでよらしいんですわ。指導してくれる若い人もいっぱい居て。自分用に機械のプログラム組んでくれはるんです”と、デイサービスの楽しみを語る。また、“デイでは好きにしゃべってます。ほんまに行き届いて、私は感謝しかないです”という語りもある。そして、“デイは迎えにきてくれます。そして、送ってくれます”と。共通して、“デイサービスの人、どんなに親切か”など、機能訓練型のデイサービスの満足度は高い。また、“一人だからデイでみんなと話せるのは楽しい”と、語りの場がある満足感も語られる。

②⑭ 「文化・イベントを楽しむ機会がある」＝若い時と同じように芸術文化に触れ心豊かな生活が実現している

“この老人会の方が、学生さんの落語会やいろんなイベント誘ってからはりますので、少し遠いですが、お向かいの奥さんと一緒に行きます”。また、“落語は聞きに行きます。最近は上の娘が一緒に行ってくれます。車で連れて行ってくれるので、助かります”という語がある。“今、たまにお芝居の案内が来ます。南座とか、行ったりしています”など、都市に住む利点は、身近にさまざまな芸術を楽しめる環境があることで、超高齢期でも趣味を継続できる。そのことが、いつまでも老いない心を醸成しているようである。

〈地域コミュニティ要因〉

②⑤「濃密な近所付き合い：よう喋る」＝長年住み慣れた地域なので近所の人同士よく喋る関係が出来上がっている

“何か出会うと、挨拶と立ち話します”、“近所の人、会ったら、ご挨拶はしてます。会長やってきたさかいね”、“居らはったら、喋るし”、いずれも男性の語りである。地域活動している女性は、“1日でも外に出ているとご近所の人は心配されるので、出かけるときはご近所に言って行くようにしてます。黙っていくとご近所が心配してくれるから、それも幸せかなと思います”と語る。一方で、“それでも、今はこのへんの家閉まっていますでしょう。みんなが歳いったし。コロナであまり話さないし。病院に入ったり、寝たきりになったりね”という語りがある。“昔は、気楽に声掛けしたけど。なんぼでも話したけど、この町内もお年寄りがいなくなって、どうしてると声掛けすることがなくなって”という語りもある。高齢化で、近所のおしゃべりも減っているようである。

②⑥「地域の祭り：コミュニケーションの場」＝祭りや地藏盆は町内のみんなの力で、伝統を絶やさぬ誇りがある

京都の町内は、子どもの成長を祈願する地藏盆や町内安全のお千度などの伝統を守ってきた。地蔵盆があつてお寺でやってくれはります。皆で寄って、お茶飲んだり、お喋りしたりします。今は、地蔵盆は1日だけです。若い人はね、忙しいからね”の語りがある。“伝統行事、この辺は盛んです。昔ほどでないけど”と男性。“昔は、祇園祭に松原通、この狭い所を通っていたからね。2階から見えました”。鉦の高さに合わせて、家の2階はみんなその高さに合わせて作ったのです”と、家の高さが同じ理由が語られる。また、“お千度は本殿の周りを回ります。それぞれの町内が持っています。町内の皆さん、参加します”など、祭りの日常が語られる。伝統を守ってきた自治の誇りを感じる。

一方、伝統行事もコロナの影響が尾を引いている。“祇園祭りでやってきた松飾の儀式は今年はやらないのです。2年間やってないので、儀式の松は雄松と根松を準備するとか、お菓子やお供えする物は昔から書付があつて、そのとおりにやっているのですが、その材料が揃わないのです”。“伝統行事は3年やっていないともうできなくなる。本当に、できなくなります”の語りは重い。

②⑦「お互いへの思いやり：お裾分け」＝日常的に気取らない助け合いの知恵がある

“わたしとはね、そのAさんがくれはるんです。おかず出来たし、食べへん？”と言って。親切な人なのです”。ある人は、“食品売り場に行っている人がいて、売れ残りなど2、3品頂きます。助かります。珍しいものも頂いてます”と、おかずのお裾分けは一人暮らしにはうれしい思いやりである。また、“(お裾分け)やっぱりあります。すいかを切って食べきれへんし、食べてくらはりますか”と言って、持ってこられます。“お野菜もたくさん頂いたら、食べきれないので、取りに来てくらはりますか、食べてくらはりますか”と言います。“頂いてもらえますか、たいそうなので。そなんだと、半分切ったりして持っていけないし”という語りがあった。

頂いてもらえますか、たいそうなので使わないに、京都人特有の心遣いを感じる。また、食べ物だけでなく、編み物でも“好きなものとしてくださいと言って、差し上げました”など、趣味を通じた交流がある。一人暮らしの高齢者には、お裾分けに相手の優しさを重ね、幸福感を得ているようである。

②⑧「ボランティア：自立と生きがい」＝活動は1日のなかで無理なく行って、自立と生きがいがつながっている

“地区のボランティアをしています。40坪の畑があります。生徒さんが実際に作物を作って育てていく過程を勉強していくのですが、子どもたちが出来ない部分をお手伝いしています”という語りがある。祇園祭りの行事では、“長刀鉦町の鉦に乗っているお稚見さんがここで休憩をされる。今は、その前の14日にお越しになって、儀式があつて、冷たいお茶と、お抹茶をたててやっているのです”と語る。また、“老人会の食事づくり20年ほどしてましたが、コロナから食事会がなくなりまして”という語りがある。

超高齢期の今も、町内会、老人クラブ、女性会など、それぞれが身近な活動に従事し、地域を良くすることに共通の思いを持っている。地域のつながりがボランティア活動を継続させ、自立と生きがいの源になっているようである。

〈人格形成の要因〉

②⑨「ポジティブに語る疎開体験」＝超高齢者は戦争体験者で疎開の経験は人生にプラスになったと語る

超高齢者は戦争体験者である。しかし、年齢によって異なる。80代後半は小学生で集団疎開、90代は中学生で勤労奉仕に行った経験者である。集団疎開はネガティブに語られがちであるが、“終戦後、お世話になった所にグループでお礼に行ったり、交流が続いていた”という語りがあった。戦時中の苦しい体験の中でも、人々のやさしさはその後の人生を豊かにしたことだろう。また、ある人は、1年間疎開した田舎暮らしが、“将来的に役に立った”と、人生を振り返り語

った。“1年ずーと、おったから、1年の動きを体験できたのが良かった”と、70年以上前を回顧して生き生きと語ってくれた。一方、ある人は、行きたかったけど、親から、“そんなとこに行ってもあかん。京都があかんかったら、そこもあかんし”と言われて行っていないと語った。幸いに、京都に爆弾は落ちなかった。

⑩「仕事、育児、介護：やり切った感」＝仕事や育児、介護も力尽くし、旅行など趣味も楽しみ、やり切った感がある
 “子どもの頃は苦勞して。戦争も知ってるし、色々苦勞しました。しやけど一応、後は良い人生だと思えます”や、“百貨店とか行かんようになりました。旅行も何もかも行ける間に行ったから、もう堪能してます。なんも行きたいと思いません”という語りがあつた。また、“外国はたいがい行きました、アメリカもヨーロッパも”という語りがあつた。また、“若い時から山が好きで、アルバムは25冊ほどあります”など、ポジティブな今を生きる源には、悔いのない人生、やり切った感がある。

⑪「町内会活動やってきたつながりがある」＝町内会は自治の基本で自分事として関わってきた自負がある

“昔は、役はみんな順番に回ってくるので、やりました。昔は春と秋は町内会でどっか行く。八瀬とかね。そういうふうにして行ってきました”という語りや、“若い時は、地域の役、みんなやりました。今は、息子がやっています”という語りがあつた。

“町内会もつながっているから、女性会も続いています。だれか手抜きしたら、一遍に潰れるわ。それぞれの学区が努力してくれるので”という現状が語られる。つながりがあるのは、それぞれに地域活動や民生児童委員、老人福祉員などを担ってきたことが、今につながっている。“やっぱり、人の絆ですかね。自然に知らんうちにできていると思えます”の語りに象徴される。

【精神世界：老年的超越の次元】

精神世界：老年的超越の次元は、宇宙的超越、自己超越、執着の超越の3つから形成されている。

⑫「宇宙的超越：死の恐怖が薄らいで先祖や社会に生かされている」＝先祖や社会に生かされている超越感

“死の恐怖はありません。心は穏やかになりました”という語りや、“今は、1日1日が済んだな、という感じです。これからケガせんように、コケンようにして”という語りがあつた。また、“死ぬことは、昔は怖かったけど、この頃、それがなくなりました。そら、生まれたら、死ななあかんし”という、死の恐怖からの解放された語りがあつた。そして、“生かされていると思えます、広い意味の社会とつながって、生かされていると思えます”という語りがあつた。一方、“死の恐怖心、あります”、“死んでどうなるかと思う”という語りや、“生かされていること、感じることはない”、“生かされている考えたことないね”がある。また、“ドやろね。自分ではそう生かされてると思っているけど。さみしいこともない”、など、否定派の語りもある。生かされている感に、先祖だけでなく、社会に生かされているという語りは、これまでの他地域の超高齢者になつた語りであり、新しい発見であつた。

⑬「自己超越：思い出すのは楽しいことばかり」＝過去の思い出は楽しいことばかりという気持ちが増してくる

“昔の楽しいこと出てきますが、嫌やなことや腹立たしいことは浮かんでこないですね”という語りがあつた。“コーラスで20年間やってきたら、色々あつたけど、楽しい思い出ばかりです”という語りがあつた。“やっぱり、感謝、多いですね”という語りもある。“ありがたいという気持ちが、歳ごとに増えてきてます。当たり前から変わってくる。作夜、便が出たわ。ありがたいなと思う。当たり前のことだけ”という、語りもある。一方で、“過去の出来事で、やっぱりあの時、こう言えばよかったと、そういうこと思えます。あかんと、思うんですね”と、美化できない、葛藤を抱えている人もあつた。しかし、“若い時に気づかなかったこと、しかたがないこと”と切り切る人もあつた。

⑭「執着の超越：ものやお金でない幸せがある」＝お金でない自由という幸せがある

“今はお金でない幸せがあります。今は、自由で、こんな幸せないわ”や、“ものへの関心もなくなりました”。“お金はないと困るけど、あつても持って死ねへんし。あかんから、孫たち皆に使って死のうと思っています”という語りがあつた。一方、(ものや交際,)関心はなくなっているという語りとは逆に、関心があるという語りもある。“お年寄り、特に、お寺さんと会うのは、前は嫌やつたけど、もっと、お付き合いの方がいいかなと思ってます”という、超高齢期になつた新たな学びへの気づきがある。一方で、少数派ながら、“ものやお金への興味がなくなる、そんなことないです。あります”や、“義理のあるお付き合い、大事やと思ってます”という語りもある。伝統を大事にする京都の生活のなかで、義理のあるお付き合いも重要な意味があるようである。

4 考察

4.1 アンケート調査結果

(1) 心理面・健康観の量的側面

下京区の超高齢者の暮らし向きや生活の満足度は高い状況にあることが明らかにされた。健康面では11人中9名が医療機関に受診中であるが全員健康意識は高い。高齢期に特有の高血圧や高脂血症などは、多くの人が遺伝だから仕方がないと割り切っている。遺伝要因は努力を超えると達観したのであろう。投薬など医療を利用しながら病気をネガティブに捉えることなく、自分なりの工夫で自立生活を送っている。長寿時代の超高齢者の健康観は病気＝病人でなく、自立している人＝健康という意識なのであることが伺えた。

(2) 社会とのつながりからみた量的側面

安梅の社会関連性指標の領域の全体得点は男女とも高く、超高齢期においても社会とのつながりを保ちながら積極的で、満足度の高い暮らしを実現している実態が明らかにされた。このことは、筆者らが同区を対象としたアンケート調査からも自治の基盤や濃密な交流実態が明らかにされており、そのことを裏付ける結果となった。

4.2 インタビュー調査結果

(1) 導かれたコアカテゴリー

11人の語りをM-GTAで分析した結果、『老春：自由とつながりのある今が一番の幸せ』というコアカテゴリーが浮かび上がってきた。超高齢者の時代背景を考えると、見合い結婚が主流（本調査でも恋愛結婚は1名）で、女性たちの娘時代はお稽古事や礼儀作法など嫁ぐための準備に明け暮れ、青春という自由を味わうことなく過ごしてきた。結婚後は、嫁いだ家の伝統や習慣、しきたりに従い、嫁として家事、育児、子育て、家業・仕事に奮闘し、その後、舅姑や夫の介護を経験している。自我を抑え、親戚などとの付き合いの関係を重んじ、尽くしてきた。

しかし、超高齢期を迎え一人暮らしになって、誰からも何も言われず、拘束されるものもなく、自由にのびのび暮らすことができている。これこそ、“老春”、一番の幸せ、という境地に到達したのであろう。女性たちの、“今は何しても、誰にも叱られしませんから”、“誰も何も言わないし”という言葉に、制約のある暮らしからの解放感をみることができる。そして、一人暮らしではあるが日常的に交流があり、孤独ではない暮らしがある。身体機能の低下を超えたサクセスフルな暮らしが実現しているのである。

(2) 自立した暮らし

老春という要因には、趣味を楽しみ、お喋りを楽しみ、地域との活動や交流を楽しみ、自身を律する暮らしを実践してきた生き方への確信した哲学を持っている。そして、積極的にボランティアな生活も実践している。子どもとつながりながらも、迷惑をかけたくないという意志力も強い。“子どもは死ぬまで子どもで、親は死ぬまで親だから、歳いっても子どもですから、親としては心配をかけないようにしたいと思っています”という言葉は、利他的、かつ超越的な語りとして印象的である。

加えて、若い頃から仕事や家事を頑張った感覚や趣味の海外旅行、本格的登山など、好きなことを十全にしてきた経験が、これまでのやるべきことをやり切った感として、後悔のない今の生き方、個の自立を高めている。

(3) 京の生活文化

「しまつ」などの各家の習慣やしきたりは、今となると老いの生活を支える要因にもなっている。親（義親）を看取った経験からも学びを深め、生活の知恵となっている。祭りや近隣とつながった安心した生活環境もある。京都では、大事なものに「さん」をつけるという。お経さんも、その一つであろう。

“朝はパンですので、主人が亡くなって10年。パンとコーヒーは必ず主人にもお備えします。主人の分も必ず焼いておいて。ご飯をあけてなくても、気が楽になります”との語りに、亡くなった人と今を生きる人の共存の姿を見る思いがした。伝統や習慣は、今

の生活にあわせた無理のない形こそ続いていくのであろう。

これらの語りは、下京区の自治関係者へのアンケート調査からも同様に明らかにされた。各学区とも自治を基盤に信頼のプラットフォームが形成されており、周囲の高齢者への敬老意識も高い。それに応えるように、支えられる側に甘んじることなく、地域貢献する超高齢者の活躍があった(富澤ら, 2023)。

一方で、地域の課題も語られた。市内中心部にあってでも少子高齢化が進み、京都独自の伝統行事である地蔵盆も縮小傾向にある。マンションの林立で、景観や昔ながらの町内会活動など、つながりの希薄化も出ている。

(4) 都市部の利便性とコミュニティ

超高齢者にとって、医療機関や機能訓練型のデイサービスの充実頼もしい存在である。また、身近に音楽や観劇、登山、旅行など、文化芸術に親しめる機会が多いことも都市生活の醍醐味である。なお、都市部の課題とされる社会的孤立の語りは全く出てこなかった。その要因としては、長年住み慣れたところで暮らし、馴染みの人も多く、日常的な交流が濃密であることにあるのであろう。

また、超高齢者は地域の祭りや伝統行事、学区自治の活動を担ってきた貢献者であり、その延長線上で、今も門掃きなど地域の衛生環境に貢献している。加えて、会うと“よう喋る”間柄、おかずの“お裾分け”など、つながりや思いやりの習慣が一人暮らしの心も食卓も豊かにし、孤立を感じることはない環境を実現している。

(5) 老年的超越への道

超高齢期のサクセスフルエイジングの要因の一つに、精神的次元の力量ともいえる老年的超越の形成がある。これまでの筆者らの先行研究(富澤, 2010; 2016)からは、老年的超越には、宇宙的超越、自己超越、執着の超越の3つの次元が明らかにされている。今回の下京区の調査でもこの次元が見いだされた。

①宇宙的超越の次元では、「死の恐怖が薄らいで先

祖や社会に生かされている」という超越観の語りに象徴される。しかし、これまで先祖に生かされているという語りはあったが「社会に生かされている」という語りはなかった。コミュニティとの強固なつながりが、社会に生かされているという境地に達するというのを改めて確信することとなった。

②自己超越の次元では、「思い出すのは楽しいことばかり」という利他的超越的な語りがあった。加齢はネガティブに考えがちであるが、歳を重ねることは、もしかしたら楽しいことかもしれないということ、若い世代に伝える貴重なメッセージとして受けとめられる。人生の先輩の言葉は、理論から導き出されたものでなく、実践されてきたゆえの言葉として大きな意味がある。

③執着の超越の次元では、「ものやお金でない幸せがある」という超越的な幸福感が語られた。“今はお金でない幸せがある。今は自由で、こんな幸せないわ”という語りに、ものへの執着との距離ができ、これは新たな次元に到達したゆえの幸福感といえよう。

超高齢者の老年的超越へ通じる道は、若い頃の仕事や生活における苦しみや喜びという体験を経たのちに身につけた心の落ち着き、生活や仕事の知恵、熟達した技などを含む「精神的資産」として、地域の若い世代へ影響を与える存在でもある(富澤, 2022, p17)。

しかし、同時に、「ものやお金でない幸せ」には、昨今の超高齢者に課せられる社会保険料や医療費負担増、年金への不安など、多くの要因も含んでいる。これらを顕在化させることなく、一人ひとりの「生きがい」を大切に心身のケアを定着させる課題は大きい。

5 まとめ

本稿では都市部に居住する超高齢者を対象に、加齢に伴う機能低下や社会的孤立などの深刻な側面が強調されがちな超高齢期において、地域という場における「語られる人生」の生い立ち、成り立ちを複

数調べ、彼ら／彼女らがどのように地域コミュニティと関わり、どのようなサクセスフルエイジングや老いの力量とされる老年的超越に達しているのか、量的・質的両面から明らかにすることであった。

結果、語りの分析からは「老春：自由とつながりのある今が一番の幸せ」という「幸福な古い」と「老年的超越」が浮かび上がってきた。これまでの調査からも、「老年的超越」は周囲とのきずなや信頼感の中で醸成されるポジティブな生の証であり、自立や幸福感を形成する源であることが明らかにされている（富澤，2018a）

今回の結果からも、コアカテゴリーの「老春」のなかに、自由で、束縛されない一人暮らしの今を楽しんでいる実態が明らかにされた。それらを醸成する精神世界には「宇宙的超越・自己超越・執着の超越」の次元が確認された。「老春」と語られた言葉には、サムエル・ウルマンの『青春という名の詩』の「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方を言う・年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる」（宇野訳，1986）という詩が、現実の生として理解される。同様に、老いは世阿弥（1958）の言葉にある、若い生命が持つ鮮やかな「時分の花」から、枯れてもそこでひそやかに咲き続ける「まことの花」への完成の過程なのでもあろうとも確信できる。

下京区の超高齢者の幸福の客観的基礎には、心や知恵の問題だけでなく相手を思いやるボランティアな習慣や近隣での協働作業がある。これらを通じた、学びあい・育ちあう関係も超越的な幸福を形成していくということであろう。ますます進展する長寿超高齢社会は、少子高齢化の深刻化や認知機能が危惧される未来ではない。むしろ、それとは逆のシナリオ、超高齢者の叡智・ノウハウ・技を「資源」として地域で活用することで、持続可能な地域社会が完成していくだろう。このことは、超高齢者の幸福感は若い世代の幸福とは質的に異なっており、今回の調査は、富澤（2022）がアマルティア・セン（1988）の言葉を超高齢者に当てはめ引用した下記の記述と

響き合う結果となった。

自らの幸福とは：（超高齢者の場合は）潜在能力を開花することである。自らの欲求とは：（超高齢者の場合は）近隣と共に生きて共に励ましあい高まりあうことである。自らの厚生に関する自己の見解とは：（超高齢者の場合は）若い頃と比較しての今の幸福という認識である。自分の動機とは：（超高齢者の場合は）隣人を大事にして次世代を育てることである。選択行動における自分の最大化対象とは：（超高齢者の場合は）若い頃と比較して、今を積極的に選択し幸福感を最大化することである（富澤，2021，p17；セン，1988，p14）。

6 本研究の限界

本研究は京都市下京区に居住する超高齢者を対象としたが、全員が長年地域に住まう戸建ての住民であり、マンション居住者の語りを聞くことができなかった。都市部でのマンション暮らしの実態や交流実態、サクセスフルエイジングについては今後の研究課題となった。また、対象者は比較的自立度の高い超高齢者層であった。したがって、この結果を超高齢者一般に当てはめることはできないが、超高齢者の積極的な語りからは、加齢はネガティブなことだけでないという希望を見出すことにもなるのではないかと考える。

また、下京区の超高齢者は失われていく京ことばの語り部であった。寿岳（1979）は、「京都の文化は京都の言葉であるといつてよい面がある」と述べている。京都の歴史が引き継がれた、はんなり⁷⁾とした心地よい響きは、超高齢期の京の生活文化そのものようであった。それ故に、できるだけ紙幅を割いて紹介することにした。本研究が超高齢者のポジティブな側面や幸福感の理解、超高齢者の潜在能力を生かした持続可能な地域づくりへのきっかけになれば本望である。

謝辞

本研究は、下京区長さんをはじめ福祉事務所の方々、地域包括センターの方々、町内会の方々、そして調査に協力して頂いた超高齢者の方々のご協力の賜物であり、ここに深く感謝申し上げます。

注

- 1) 平均余命は男性81.05歳、女性87.09歳である (厚生労働省, 2022)。
- 2) 「老年的超越 (Gerotranscendence)」はスウェーデンのラーシュ・トーンスタムが提起した概念で、ギリシャ語の老年を表す Geron と英語の超越を表す Transcendence の合成語である。
- 3) 下京地域情報サイト: <https://shimogyo.city.kyoto.lg.jp/boards>
- 4) 下京区データ: <https://www.city.kyoto.lg.jp/shimogyo/page/0000011965.html>
- 5) 例えば、「梅逕学区 (ばいけいがっく)」は平安京の昔には梅の並木があったことに由来し、大内学区は、応仁の乱で西軍に属した周防の大名・大内政弘が周辺一帯を占拠したことから名付けられるなど、古の都から引き継がれた歴史や伝統をうかがわせる。また、「有隣学区」は、「論語」里仁編の「徳は弧ならず、必ず隣有り (徳不弧必有隣)」から、「開智学区」は、浄住子「開智生福 不墮懸趣」の「知識を開拓する」から名付けられる。また、「修徳」「成徳」などの学区名には地域の伝統的教育観を感じることができる。
- 6) ここでいう始末とは、片付けるとか、ケチするという意味でなく、無駄遣いをしない、という意味である。
- 7) 語源は「花なり」または「花あり」とされ、おしとやかで、落ち着いた華やかさ、上品に明るく陽気なさまを表す。

【参考文献】

- Baltes, P.B. & Smith, J. (2003) New frontier in the future of aging :From Successful Aging of the young old to the dilemmas of the Fourth age, *Gerontology*, 49, 123-135.
- 安梅勅江 (1997)「高齢者の社会関連性評価と3年後の

機能低下との関連性に関する保健福祉学的研究」

『日本公衛誌』44 (3) 159-166。

- 安梅勅江・島田千穂 (2000)「高齢者の社会関連性評価と生命予後：社会関連性指標と5年後の死亡率の関係」『日本公衛誌』47 (2) 127-133。
- 安梅勅江・篠原亮次・杉沢悠圭ら (2006)「高齢者の社会関連性と生命予後：社会関連性指標と7年後の死亡率の関係」『日本公衛誌』53 (9) 681-687。
- 宇野 収・作山 宗久 (編) (1986)『「青春」という名の詩一幻の詩人サムエル・ウルマン』産業能率大学出版部。
- エリクソン, E.H & Erikson, J. M (2001)『ライフサイクル, その完結増補版』村瀬孝雄・近藤邦夫訳, みすず書房 (The Life Cycle Completed: A Review Expanded Edition WW Norton & Company,1997)。
- 京都市下京区。「下京地域情報サイト」<https://shimogyo.city.kyoto.lg.jp/boards> (2022.7.12閲覧)。
- 木下康仁 (1999)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生』弘文堂。
- 木下康仁 (2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い』弘文堂。
- 厚生労働省「令和4年簡易生命表の概要：令和5年7月28日付け」<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life22/dl/life22-15.pdf> (2023.8.30閲覧)。
- 権藤恭之 (2008)「生物学的加齢と心理学的加齢」,(権藤恭之編)『高齢者心理学講座15』朝倉書店。
- 権藤恭之・古名丈人・小林江里香ほか (2005)「都市部在宅超高齢者の心身機能の実態：板橋区超高齢者悉皆訪問調査の結果から」『日本老年医学会雑誌』42, 199-208頁。
- 新日経 BP ビジヨナリー研究所 (2018)「医療経済の視点から探る増大必死の“高齢者医療負担”への処方箋」健康保険が危ない崩壊前夜！日本の医療スペシャルレポート Vol.5 <https://special.nikkeibp.co.jp/as/201401/kenpo/special/vol5/> (2023.8.20閲覧)。
- 寿岳章子 (1979)『暮らしの京ことば』朝日新聞社。
- セン, アマルティア (1988)『福祉の経済学：財と潜在能力』鈴木興太郎訳 岩波書店 (Commodities and Capabilities, Elsevier Science Publishers B.V,

- 1985)。
- 総務省 | 平成27年版 情報通信白書：少子高齢化・人口減少の経済への影響」の <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc251120.html> (2022.12.1閲覧)。
- 筑波大学エンパワメント研究室 <https://plaza.umin.ac.jp/~empower/anme/research/isi/> (2023.7.20閲覧)。
- トーンスタム, L (2017) 『老年の超越；歳を重ねる幸福感の世界』 富澤公子・タカハシマサミ訳, 晃洋書房 (Gerotranscendence: A Developmental Theory of positive Aging, *Springer*, 2005)。
- 富澤公子 (2009) 「奄美群島超高齢者の日常からみる『老年の超越』形成意識」『老年社会科学』30, 477-488頁。
- 富澤公子 (2015) 「遠野スタイル: 超高齢者いきいき物語」遠野みらい創りカレッジ編『地域社会の未来をひらく：遠野・京都二都をつなぐ物語』水曜社, 88-99頁。
- 富澤公子 (2018a) 「“老年の超越を”導く地域のきずな」『医療と介護 Next』vol.4 (1), 28-31頁。
- 富澤公子 (2018b) 「長寿地域における長寿の地域要因と支援要因の分析：京丹後市を事例」として『大阪ガスグループ福祉財団調査・研究報告集』Vol.31, 13-19頁。
- 富澤公子 (2019) 「奄美群島における長寿の地域要因と支援要因の分析」『国際文化政策』10, 71-93頁。
- 富澤公子 (2020) 『長生きがしあわせな島 (奄美) DVD付』かもがわ出版, 2020年。
- 富澤公子 (2021) 『幸福な老いを生きる：長寿と生涯発達を支える奄美の地域力』水曜社。
- 富澤公子・中西典子 (2023) 「人生100年時代の健康長寿を支援するコミュニティ課題：高齢者の近隣との交流実態における都市部（京都市下京区）と農村（京丹後市）との比較を通じて」『立命館産業社会論集』59, (1), 181-199頁。
- 富澤公子・Masami Takahashi (2010) 「奄美群島超高齢者の『老年の超越 (Gerotranscendence)』形成に関する検討：高齢期のライフサイクル第8段階と第9段階の比較」『立命館大学産業社会論集』46 (1), 87-103頁。
- 富澤公子・Masami Takahashi (2016) 「健康長寿と幸福な老いの環境要因：長寿地域「京丹後市」を事例とした実証研究」『2014年度助成ジェロントロジー研究報告』No.12。
- みずほリサーチ&テクノロジーズ (2021) 『社会的孤立の実態・要因に関する調査分析等研究事業報告書』(厚生労働省令和2年度社会福祉推進事業) (2023.1.8閲覧)。
- 山田浩之ら編 (2019) 『京都から考える都市文化政策とまちづくり』ミネルヴァ書房。
- 世阿弥 (1958) 『風姿花伝』岩波書店。

Factors of Successful Aging Seen in “Life Talked” in Urban Life:
Analysis Using Modified Grounded Theory Approach and Social Interaction
Index among Oldest Old Living in Shimogyo-ku, Kyoto City

TOMIZAWA Kimikoⁱ, NAKANISHI Norikoⁱⁱ

Abstract : This paper focuses on the oldest old living in Shimogyo-ku, and discusses how to interact with the local community and achieve successful aging (Happy aging) and Gerotranscendence in oldest age, when serious aspects such as decline in mental and physical function and social isolation tend to be emphasized, clarified from quantitative and qualitative aspects. As a result of analyzing the qualitative data with the Grounded Theory Approach (M-GTA), the core category was derived as “youth of old age: freedom and connection is the best happiness now,” and in the spiritual life, “cosmic transcendence,” “self-transcendence” and “material transcendence” dimensions were confirmed. Quantitative data on social-related indicators showed high scores in all areas, such as “independence in life.” The survey revealed that the oldest old people in Shimogyo-ku do not feel lonely as they are connected with their children, friends, and neighbors, and that they enjoy the present, which they say is “youth of old age,” and have positive lifestyles that contribute to the community. A quantitative survey conducted during the same period of time among those involved in self-governance also showed a strong platform for autonomy. It was confirmed that even though the oldest old use medical care and nursing care insurance, they are highly health-conscious and are a resource that contributes to the community.

Keywords : Oldest Old, Successful Aging, Gerotranscendence, Community, Modified Grounded Theory Approach (M-GTA), Social Interaction Index

i Visiting Researcher, Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University

ii Professor, College of Social Sciences, Ritsumeikan University